

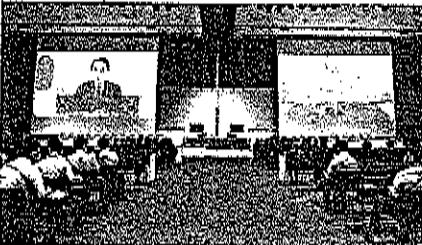
8/10 早稿

核抑止脱却の勇氣を

長崎原爆の日 平和宣言

からぬ脱却を國家が持つて
決断すべきだ」と語った。
岸田文雄首相は、ヒト・オ・
シセーシでサミットの成果

戦後
78年



長崎は九日、米軍の原爆
投下から七十八年の「原爆
の日」となった。当時の市
の丸に接近に伴い、長崎市
主催の「長崎原爆犠牲者慰
靈和祈念式典」は、例年
の平和公園かぎりに屋内会場に変更され
た。鈴木史朗市長は就任後
初の平和宣言で、五回に亘
かれた先導七カ国首脳会議
(G7)で広島サミットの核
軍縮文書「広島ル・ラン」
を批判し、「核抑止への依存

の現状が原爆によっても過る
べきだ」と強調。ウクライ
ナを侵攻するロシアの核威
嚇を非難し、被爆の実相を
世界へ伝達したい訴えた。

被爆者の一般参列が取
りやめとなる中、被爆者代
表の熊本県原爆被爆者団体
協議会理事、工藤武子さん
(80)=熊本市=は「平和く
の想」で、「日本は被爆
と人類の未来を行なうには
核兵器廃絶しなくて強く
訴えるべきだ」と強調し
た。

言相が式典に参列しなか
つたのは一九九九年以来。
六日清晨で、過去最多だった
昨年の来館者を越える八十
五カ国・地域が出席を表明
していた。ウクライナ侵攻
を受け、ロシアもグル
クを招待しなかつた。

のからじの原爆に対する過る
べきだ」と強調。ウクライ
ナを侵攻するロシアの核威
嚇を非難し、被爆の実相を
世界へ伝達したい訴えた。
被爆! 由の鈴木市長は、
平和公園の被爆被爆者団体
ミーティングを開催する用意を
示したが、被爆者の謝意を
経て修正した。

を強調し、「被爆縮の進展に
包みこむ機運をめり、「廢戦め
る」と述べた。=核心③
国、平和宣言書文②面、開
連③面

六日の広島の平和宣言に
続き、被爆地の代表が核抑
止の考え方を肯定した。
式典は被爆地「出迎えツッ
セセイ」で開催。首相や各
国駐日大使の参列は中止と
なり、被爆者代表や市議の
参列者四十一人は、原爆が
さしかかった年前十一時一分
に黙坐した。

市長は宣誓で、原爆の熱

線で体が焼けただれた「赤

い背中の少年」の被爆体と
して知られる故谷口穂波さ

んの体験を紹介し、「原子

の下で人間に何が起つた

長崎市長平和宣言全文

「突然、背後から虹のような光が目に映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路にたたきつけられました。背中に手を当てるど、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただけの皮膚がべつとり付いてきました。三年七ヵ月の病院生活、その内の一年九ヵ月は背中一画大やけどのため、うつぶせのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床擦れで骨まで腐りました。今でも胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨(ろっこつ)の間から心臓の動いているのが見えます」

核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。今、私たちに何が必要なのでしょうか。

「七八八年前に原子雲の下で人間に何が起つたのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まつたら、地球上に人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合つべきです。今年五月のG7広島サミットでは、参加各國リーダーがそろつて広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で世界に示しました。また、二のサミットの

成黒文書である「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」では、「核戦争に勝者はいらない。決して戦ってはならない」ということが再確認されました。しかし、この広島ビジョンは、核兵器を持つ国も自国の安全を守るという「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。核抑止に依存

原爆がさく裂した時刻に合わせ、「長崎の鐘」を鳴らす人たち=9日午前11時2分、長崎市の平和公園で

していては、核兵器のない世界を実現することはできません。私たちの安全を本当に守るために、地球上から核兵器をなくすしかないのです。核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。今こそ、核抑止への依存から脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心とした安全保障の考え方のもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

唯一の戦争被爆国の行動を世界が見つめています。核兵器廃絶への決意を明確に示すために、核兵器禁止条約の第2回締約国会議にオブザーバーとして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、朝鮮半島の非核化、北東アジア非核兵器圏地帯構想など、この地域の軍縮と緊張緩和に向けた外交努力を求めます。

地球に生きるすべての皆さん、一度立ち止まって、考えてみてください。

被爆者は、思い出すのもうらい自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴え

島沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、「平和の文化」を世界中に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

「被爆の実相を知る」ことが、核兵器のない世界への出発点であり、世界を変えていく原動力にもなり得るのです。

私は、両親とともに被爆者である被爆「一世」です。「長崎を最後の被爆地にするため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来にうなぎでいきます。

日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意をさげるとともに、長崎は、広

え」そが、七十八年間、核兵器を使わせなかつた「抑止力」となつてきたのではないでしようか。

その被爆者の平均年齢は、今年八十五歳を超えました。被爆者がいなくなる時代を迎えるようとしている中、「この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人一人の行動にかかっています。

被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て、感じてください。そして、世界

「平和への誓い」全文

七十八年前の八月九日、七歳の私は爆心地から約三キロの（長崎市）片浦町の自宅で母や姉、第二人の五人で食卓を囲んでいました。突然、強烈な閃光（せんこう）が走り、皆一斉に庭先の防空壕（こうう）に駆け込んだ次の瞬間、地響きのような音がして私は母にしがみつきました。しばらくして壕を出でみると、縁側のガラス戸は跡形もなく壊れ、畳は跳ね上がり、食卓はひっくり返っていました。

その後、勤務先の造船所から帰宅した父は、爆心地に近い城山町の叔父の家に行き、二人の遺体を探し出し、焼け跡で奈毬（だび）に付しました。審査のがれきの下にあつた叔父の遺体も、台所で見つかった叔母の遺体も無残に焼けていたそうです。原爆投下直後、私たち家族は無事でした。被爆から十年余りたち、次第に体調を崩していった父は肝臓がんと診断され、三ヶ月程の闘病の末、亡くなりました。臨終の時、父の顔に酸素マスクを当てていた私は、「神様、私の家族をお守りください」という最期の言葉を聞き、涙が止まりませんでした。その後、母と姉、弟、そして被爆時、母の胎内にいた妹までもが、相次いでがんで亡くなりました。私自身も三年前、肺がんの手術を受けました。たった一年前の原爆で、長崎ではおよそ七万四千人、広島では十四万人が亡くなり、生き残った人々の多くも、今なおさまざま後遺症に苦しんでいます。

世界には、長崎や広島で使われた原爆の威力を大きく上回る核弾頭が約一万一千五百発存在し、ロシアのウクライナ侵略による緊迫した国際情勢の中、この美しい地球は、核兵器によつて破壊され汚染される危機にさらされています。核戦争を起さないために、唯一の戦争被爆国である日本

は、今こそ広く世界に核兵器の非人道性を伝え、武力によらない平和創造の道筋を指示し、地球と人類の未来を守るには、核兵器廃絶しかないと強く訴えるべきです。私は今から十五年前の一〇〇八年の秋から四ヶ月間、「第六十三回ビースボート地球一周の船旅」に参加し、船で世界一周をしながら自らの被爆体験を証言しました。そのとき同乗されていたカナダ在住のサーロー節子さんの力強い言動に鼓舞され、帰国後に被爆者団体の理事としてさまざまな活動を始めました。

現在は、小学校などの平和学習の場で、被爆一世の方々と製作した紙芝居を使い、被爆体験の証言活動に取り組んでいます。これは長崎に原爆が投下された後、救援列車第一号に乗り込み、救護活動にあたった当時二十歳の男性の体験をもとに製作したもので、紙芝居を見る純真な子どもたちの姿にふれるたび、私はこの子どもたちが戦争に巻き込まれ、私たちと同じ苦しみに遭つようなことがあつてはならないと強く感じています。

今、わが国には、被爆者の願いをしっかりと受け止め、核兵器廃絶と平和な世界の実現に向けて活動を続けている高校生があります。高校生平和大使、高校生一万人署名活動をしている若者たちです。さらに私の住む熊本県では高校生が「ヒロシマ・ナガサキピースメントセンター・平和の種まきプロジェクト」と題して、同世代や下の世代に向けた平和学習の出前授業も行っています。

その若者たちの姿に勇気づかれ、私は未来への希望の光を感じています。放射能に汚染された灰色の世界ではなく、命輝く青い地球を次の世代に残すために、これらも力の限り、尽くしていくことを誓います。

二〇二三年（令和五年）八月九日
被爆者代表 工藤武子

G7広島サミットの成果を土台として、国際賢人会議の議論の成績も活用しながら、核軍縮の進展に向けた機運を、より一層高めます。「ユース非核リーダー基金」のプログラムなどを通じ、被爆の実相を伝えることはあらゆる取り組みの原点として重要です。高齢化が進む被爆者の方々に寄り添いながら、総合的な援護施策を推進します。原爆症の認定について、できる限り迅速な審査を行います。

首相メッセージ要旨